

大和・奈良地域の観光に関する学術研究

本研究は3年間にわたる研究期間を終了し、報告書の作成に向けて成果をまとめている。ここでは3年目の研究について、歴史分野ついで現状と将来展望分野の順に概要報告をする。

まず歴史分野では研究対象である絵図屋筒井家所蔵資料および奈良大学所蔵関係資料の整理と分析が中心となったが、作業は当初予定のテーマ毎に分担するかたちで進められた。ほかに、歴史分野として、大和の観光に関する歌枕の研究も含んでいる。以下、各個別研究テーマごとに研究の概要を略述する。

鎌田道隆：大仏前絵図屋出版の名所記・案内図の史料学的研究

奈良の版元である絵図屋筒井家の古文書史料を分析することで、江戸期出版物の年代表現や出版事業や観光思想の原点について、これまでにない知見を得ることができた。すなわち、一見同版に見えるように再版する技術を江戸期の版元がすでにもっていること、名所記や名所案内図などにおいては、時事的な変化を追うことよりも、信仰や観光の対象となる建造物や由緒を眼前に提示することが大切にされていることなどである。詳しくは報告書でのべる。

永井一彰：絵図屋筒井家所蔵の江戸時代版木の研究

絵図屋所蔵の版木と京都藤井文政堂旧蔵・現蔵の版木との、版木の厚さの比較を進めた。その結果、絵図屋では出版物が絵図か名所記にかざられているためか、再利用されることが少ないのではないかと、そのことを絵図屋版木の厚さはものがたっているのではないかと推論を得た。

森田憲司：奈良案内記の資料学的調査－奈良大学所蔵資料を中心に－

絵図屋筒井家・奈良大学所蔵資料のほか、大阪府立図書館蔵の朝日新聞文庫や石崎文庫、また内閣文庫の寺社縁起類にも注目した。これらの仕事の結果、縁起類では異版に注目したが、異版の多い「ならめいしょえず」をとくにとりあげて研究した。このうち正倉院の表記の差異については、奈良大学図書館の展示で、かつて紹介した。

西山要一：絵図屋筒井家現蔵の版木・銅版の保存科学的研究

平成12年度は、これまでの調査に引きつづき未調査の版木・銅版の調査続行と、既調査分についてのX線透過写真撮影による虫損状況、蛍光X線分析による材質や墨・多色刷り顔料の種類などの調査も行なった。その結果、表面観察ではわからなかった虫害状況や保存処理の必要性、またクリーニングの問題も明らかとなった。

三木理史：奈良絵図屋案内図の地理学的研究

絵図屋案内図の分析指標をもとめるため、吉田初三郎の「初三郎式鳥瞰図」を比較検討した。両者は遊覧客の利用を目的として、観光地内の名所旧跡の案内を目的とした点で共通しているが、とくに絵図屋は自身のプランによる作成と販売に特徴があり、そのためか対象地域を可視的な地域に限定するという特徴がうかがえた。

上野誠：歌枕の観光地化

歌枕巡礼の旅はそのまま「歌まなび」である。大和は万葉集のふるさとであり、明日香は初期万葉胎動の地である。江戸時代の人々の明日香への関心は、聖徳太子生誕地、大化改新の故地、藤原鎌足の伝説地、古代宮都などで、旅の大衆化につらなりながら、学習型観光となっている。とくに奈良観光は学習型知識集約型である。

現状と将来展望の分野では、平成11年度の概要報告にも書いたが、本年度も共同研究という内実はあげることができず、各自の個別研究というかたちに終始したといえよう。

高橋春成：観光資源としての奈良公園のシカ

観光客の半数近くの人が奈良公園のシカのルーツを知らないという現状を踏まえ、シカのルーツや生態がわかるような掲示や展示館のようなものをつくる必要がある。また交通事故やゴミとしてのビニール袋を食べてシカが死ぬこと、農作物や店先でのシカによる食害など、現代的なシカ問題についても積極的に考えることが望ましい。

実清隆：国際観光都市奈良の景観変容とまちづくりに関する研究

奈良の場合、モータリゼーションで奈良への流入台数自体は増加している。しかし、町の活性化につながらないばかりか、歩行者通行量の減少ともなっている。奈良市のパークアンドバスライドやコミュニティバスの運行は試みの一つであるが、奈良大紀要52号で提言したループミニ地下鉄などの新交通システムが必要と考える。

芹澤知広：大和・奈良地域の外国人観光客受入れの現状についての研究

奈良市の外国人観光客受入れについては、各案内所で実際に対応しているボランティアグループの実体解明が必要である。具体的な活動をしているグループでは、奈良YMCA EGG（エッグ）、奈良SGGクラブ、奈良学生ガイドがある。これらのグループは、奈良市経済部観光課に仲立られて、年に数回の意見交換会を行なっている。

金屋平三：奈良県下におけるグリーン・ツーリズムの可能性

奈良県下の観光案内書は多いが、グリーン・ツーリズムに関するものは見かけない。今後は今までの観光案内とはやや発想をかえて、県下の各地域ごとにグリーン・ツーリズムの適地、その地域の特徴紹介や文化遺産との関係、公共交通機関や宿泊施設の案内や詳しい情報の問い合わせ先などをまとめた『グリーン・ツーリズムと遺産ガイド 奈良』といった案内書はどうか。

中川寿夫・横田浩：奈良地域の観光事業（行政と産業）－環境問題の視点から－

「奈良市民および観光客の意識調査 VS 現状」の比較分析

経済発展と環境問題についての住民の意識調査をおこない、奈良県住民の地球温暖化問題に

関する意識レベルを分析している。これらの成果をもとに新しい調査方法を開発し、「新しい調査票」を準備する段階にいたった。本研究は2001年度にも実施予定であり、前回調査との比較を含めた分析を進めたいと考えている。

大村喬一・堤博美・東山弘子：観光と食文化

奈良を訪れる人々が、奈良と奈良のたべものに対してどのような印象をもっているのかという問いに囚われた。その調査のために心理学手法としてのSD法により、奈良のたべものイメージの測定を試みた。結果、奈良の地は「精神性」と「閉鎖性」「居心地のよさ」がイメージされているが、奈良のたべものは、「豊かさ」と「地味」「家庭的」のイメージでとらえられているというデータを得た。

碓井照子：GIS（地理情報システム）を利用した観光データベース開発と研究成果プレゼンテーションシステムの開発

奈良県の観光データベースを作成し、GISを利用して地図情報とリンクさせ、インターネットで観光情報が検索できるシステムの開発をねらっている。観光パンフレットやマップの情報をスキャナーでデジタル化し、説明は独自の文章としたが、引用文献などは明記するようにつとめた。

浅田隆：奈良近代文学遺跡と観光政策

奈良にかかわる作品の抽出から、場所の特定、場所の描かれ方、作品の地域別整理、場所の探訪と写真撮影、写真の整理と保管の6分野にしぼって作業を進めた。特筆されるのは、奈良新聞記者で写真家の故北村信昭氏の遺品写真を受け入れたことで、一応紙焼にまでこぎつけたので、目録を整理して公刊し、一般の利用に供せるようにしたい。

（文責：特別研究代表者 鎌田道隆）